せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42-2590
第161号・平成15年2月1日

年表で読む 古平の歴史

《67》

金融機関の移り変り

■共益会を解散

先に、古平同志倶楽部が、近々に信用事業の経営を目的として共益会を設立した。

当時、町内の金融は、金利が月2分から3分（2～3パーセント）という個人の貸金業が一般的であった。共益会は貯金会であったが賛同する会員が多くなり、それを資金として月1分2厘5毛の金利で融資を行い、それが順調な業績をあげたことから、本格的に信用事業に参入するため共益会を解散した。

■古平信用組合の創立

当時、道内には120以上の産業組合があったが、次第に信用事業組合設立の機運が高まってきていた。大正4年、大正天皇即位大典を記念し、共益会を母体として信用事業組合を創立することになり、同年9月、信用組合の設立に向けて、町民に趣意書を配布し参加を勧誘した。発起人代表を加えて152人の連署で北海道庁に申請書を提出し、設立の許可を得た。

商業　梅野吉太郎
外壱百五拾壱名

大正四年九月二十七日付申請
無限責任大典記念古平信用組合
設立ノ件許可ス
大正四年十月二十二日
北海道庁長官　俵　孫一印

・目的　組合員ノ産業ニ必要ナル資金ヲ貸付シ及貯金ノ便宜ヲ得セシム

・出資金一口ノ金額　金弐拾円

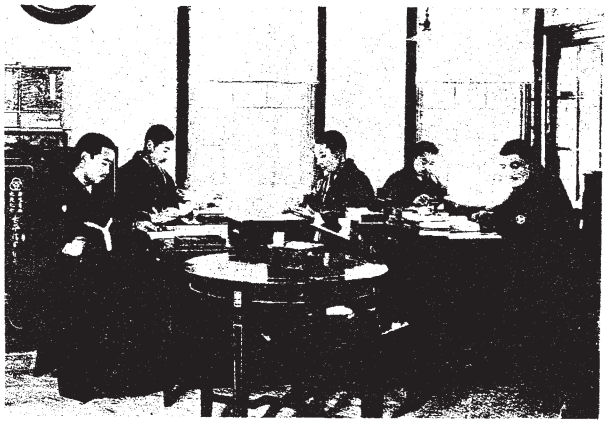
設立の登記が済み、事務所を組合長梅野吉太郎（後に襲名して富蔵）宅の一室に置き、事業を開始した。道内の信用組合で創立の最も古いのは現在の渡島信金（明治44年）、次いで旭川信金、古平信金は三番目になり、三輪のマークは共存・共栄・親和を表わすものであった。

大正5年1月16日、古平信用組合の第1回総会が開かれ、理事3名・監事2名・信用調査員の選挙が行われた。当日は福引きという余興もあった。

また、「当初は専従の職員を採用する余裕もなく、理事・監事らの5人が昼夜の別なく、新しい仕事をやり遂げようと頑張った」と、後に梅野理事長の回顧談にある。

■事務所を新築

創立以来、幸いにも業績が好調に伸びたことから、7年後の大正11年、事務所を浜町目抜き通りの一角（現在地）に新築した。古平では珍しい洋式の新事務所は町の一大偉観であった。



←開設当初の執務風景

高野名幸作さんの日記から

吉野の世相を見る

【62】

〈大正一一年〉

▼三月二〇日

朝から吹雪でまた寒中が来たようだ。店は閑散となった。刺網一〇〇間だけ出る。古英丸が入港し合羽、ボイル油ほかが入る。夜、美国の佐藤からミゴ縄二〇〇間の照会がある。現金で三二円五〇銭と通知する。父は幸治を連れて支店の湯に行く。いい湯だったと言って帰って来る。九時頃から風が吹き出し板戸がガタガタと鳴り、海は時化になった。この分だと鰊はいつのことやら。

▼三月二一日

朝のうちは晴れていたが、午後から大時化になった。支店の主人が津軽へ湯治に行かれるというので、妻が見送りに行く。父は彼岸の中日で寺参りに行く。夜、ヨ兄さん、困主人らと謡のけい古があるというので行ってみる。大吹雪で長ぐつをはいて行く。海は大時化だ。

▼三月二二日

起床七時、寒さも強く吹雪もひどくなる。夜は子供等の優等賞をもらったのを祝って、うどんやカレーライスを作った。

▼三月二四日

日もよほど長くなった。今日もまた寒風が吹き吹雪である。海は大時化が続いている。これで七日間も時化続きだ。鰊漁もこの分ではさらにダメだ。熊さんと伊藤さんは九時からリンゴの枝切り、この寒風では大変だろう。美国の成田から改良網四五〇間、丸山町四へ並三〇〇間出た。夜になっても板戸がガタガタして海は大荒れだ。

▼三月二五日

時化も少しおさまったようだがまだ投網できぬ。農園では枝切り、店ではロープ、アバ縄、綿糸などの客で忙しい。今頃は昨年、一昨年と初鰊を見たのに、今年は時化とこの寒さで遅れた。明日は天気も良くなるだろう。さすれば初鰊も見られるかも知れぬ。

▼三月二六日

永らくの荒れもようやく快晴となった。店は忙しいが現金売りはない。五時ころから建網も建て込む。刺網も時化の後は必ず揚がるだろうと、刺網も刺した。浜もいよいよ鰊場らしくなってきた。

▼三月二七日

昨日は建網も刺網もみんな網を入れたので、今朝の鰊漁は如何？　と、早く浜に出てみる。聞けば刈一もっこ、吉尾、小枝四尾、外は一もっこぐらいとのこと。店に来た客の話では、美国では三半船二杯も獲って、余市へ曳航していったとのことだ。いずれ明日の新聞に出るだろう。農園では枝切りで忙しい。ボタボタ雪が降り出した。カレ網は大漁で浜は賑っている。カレも沢山貰う。夜になって静かになった。今夜こそはと、みんな漁に出たろう。明日は相当に鰊漁が見られることと思う。

▼三月二八日

浜中歩方、冬、八反田歩方では三半船三杯、種金一杯、刺網は五〇～六〇尾獲ったという。朝方から時化て吹雪いてきた。八反田歩方では浜中が時化のため港町に揚げ、箱詰めにして送ったとのこと。鰊を一〇尾ほど貰う。今年の初鰊だ。古平でもまだ九分通りは初鰊を食ってはいないだろう

▼三月二九日

昨夜来の雪で、今朝も二三寸積もる。三月でこんなに寒く雪の多いのも稀だ。

▼三月三〇日

今日は快晴。ようやく春らしい天気になった。農園では今日も枝切りで忙しいが、この天気で仕事もはかどることだろう。銀行の帰り ヨ に寄りいろいろ話し、昼食を馳走になり一時頃帰る。店は閑散だ。建網も刺網もみんな網を入れた。今夜こそひと漁あらん。

▼三月三一日

天気は快晴だが鰊漁はなく、寂しい限りだ。農園の枝切りも今日で終わる。津軽の温泉に行っている支店の主人に見舞状を

出す。夜、㊥からわらじ、ツナギツラ等、平安丸に積み込んだとの電話が来る。

▼四月一日

いよいよ四月になった。鰊漁は昨夜もほんの少々だ。店は閑散としていて現金は四、五円しかない。農園の枝切りも終わって、熊さんは掛け取りに出たがさっぱり入らない。四月六日までの支払いがあったが、末日まで延期してもらいたいと依頼状を出す。夜、浜に出てみる。時化模様で雪がチラチラ降る。

▼四月二日

鰊漁さらに無し。本日まで累計三〇〇石ぐらいか。起床七時、今日も朝から雪がチラチラ降っている。鰊漁如何と浜に出て見たが一向に獲れぬ。例年は三月中に相当の漁獲があるのだが、本年は実に遅い。町中や山ではまだ雪が沢山残り、寒くてさっぱり鰊場らしくない。気候が遅れているのかも知れぬ。何となく町内も活気がない。余市一、〇〇〇石、美国二、〇〇〇石、積丹二、〇〇〇石位という。夜、静かになる。みんな投網している。今夜こそはと、みんな千秋の思いで待っている。

▼四月三日

今朝こそは鰊漁と、三時頃からモッコしょいの人たちが畑方面から出て来たが、一向に獲れぬのでみんな戻る。浜へ出て見たが建網は漁獲皆無。刺網は沢江、浜中方面で、多きは二、三本位から以下五、六モッコ、初鰊一〇軒余りから貰う。妻は背割りにしている。子供たちは浜辺で相撲などやっている。沢江まで行ってみたが、子供たちが橋の上でコマ回しをやっている。夕方、浜へ出て見る。風は冷たいが上なぎ。空はどんよりとしていて鰊ぐもりだ。明日は必ず吉報があるだろう。古平湾内一帯に電灯がつき実に明るい。一段と春らしくなった。

▼四月四日

春雨がショボショボ降り雪もずいぶん消えた。鰊漁は建網が歌棄山中、△、崎長○一などは五、六杯宛て、その他は皆無だ。刺網は四、五本から少なくても一本、合計で四、五〇〇石で、累計七、八〇〇石になった。昨年から見れば実に不足だ。まだ雪が多いことからみると、季節は早いような気がする。水温も五度C位とのこと。正午頃、佐渡から平安丸が入港。四〇個程の荷物が着いた。道路が悪く、馬車も馬そりも通りにくくて困る。港町、入船町方面ではタラが大漁。

▼四月五日

鰊漁は歌棄山中で七、八杯獲ったところがあり、刺網も一〇本位獲ったところもある。今日一日で一、〇〇〇石位だろう。夜、梅野さんで部落会があり行く。○さんも来ていたが、鰊模様があるとの知らせで帰る。今夜あたりよいかも知れぬ。一〇時半に終わって帰る。

▼四月七日

鰊漁は歌棄山中少々、刺網も薄掛かりだ。昨日の大漁で今日も沖揚げあり。刺網は昨日は全く予想外の大漁で全部揚げ切れぬので、今日も揚げにかかっている。鰊で網の目が見えぬようだとのこと。昨日は建網四、五〇〇石、刺網一、五〇〇石と予想したが、刺網は二、五〇〇石はあろう。今朝の北海タイムスは、古平七、〇〇〇石と出している。小樽新聞は一〇、〇〇〇石とあるが、確かなところ累計で一〇、〇〇〇石はあろう。今日までで余市・美国・積丹外近郡では古平が一等漁だった。寿都は漁獲皆無。磯谷二五、〇〇〇石は大漁だ。店は閑散としている。もっこしょいは九時には終わったようだが、八時頃からあめがショボショボ降り出す。もっこしょいもゆるくない。鰊場になると人の気持ちも別になるようだ。

▼四月八日

今朝九時頃、困群来漁場で一五、六杯も獲れたという。もっこしょいに来てくれと起こしに来る。出かけた熊さん、コノさん、一枝さんの話では雨風が強くなり時化模様になって来たので、港内に枠船を引かせ、沖揚げは中止にしたとのこと、こまったことだ。この日、丸山岬から本陣にかけて漁があり、〆種金などは一五、六杯も獲る。群来方面も相当の漁があった。二、〇〇〇石は獲れたろう。

―四月六日に戻って全文を掲載―

四月六日　快晴　四十三度

鰊大漁三時頃ヨリ、中央通リヲモッコショイ連中ガヤガヤ通ル。其内ニダン〳〵大勢ニナリ

テニギヤカダ。多分大漁ダロート熊サン、一枝サン、コノサン、マササン等、皆五時頃ニ出掛ケタ。予モ五時ニ起床、板戸ヲアケル。浜ヒ行ク人ハ市ノ様、歌棄山中最モヨロシク、㊍、○一、△、崎長、八反田、刃等、皆三十杯以上、㊍、○一、㊍、囚、等モ取ル。建網四千石、刺網千五百石、合計六千五百石位ハアルダロー。此ノ日ハ天気ハヨシ、ナギハヨシ、実ニ沖上ゲニハ申分ナイ日。老若男女浜ヒ集マリ、莚敷ヒテ、ヲハチ持チ出シテ、ニギリメシヲ食フモノ、大漁酒ヲ飲ンデ居ルモノ、実ニ昨日ニ変リ今日ハ人気付ク。殊ニ刺網ハ大漁、多キハ五、六十本モトル。カカッタコト真白クナッテ居ル。ナギガヨイノデ船モ沈ミソーニ満船シテ来ル様、実ニ見事ダ。妻、父、予ハ留守役。雪消シヤッタリ、背割干シ等スル。此日、熊サンハ崎長、一枝サン、コノサン㊍、マササン㊍ヘ行ク。夕方カラヲカモッコショイデ実ニニギヤカダ。

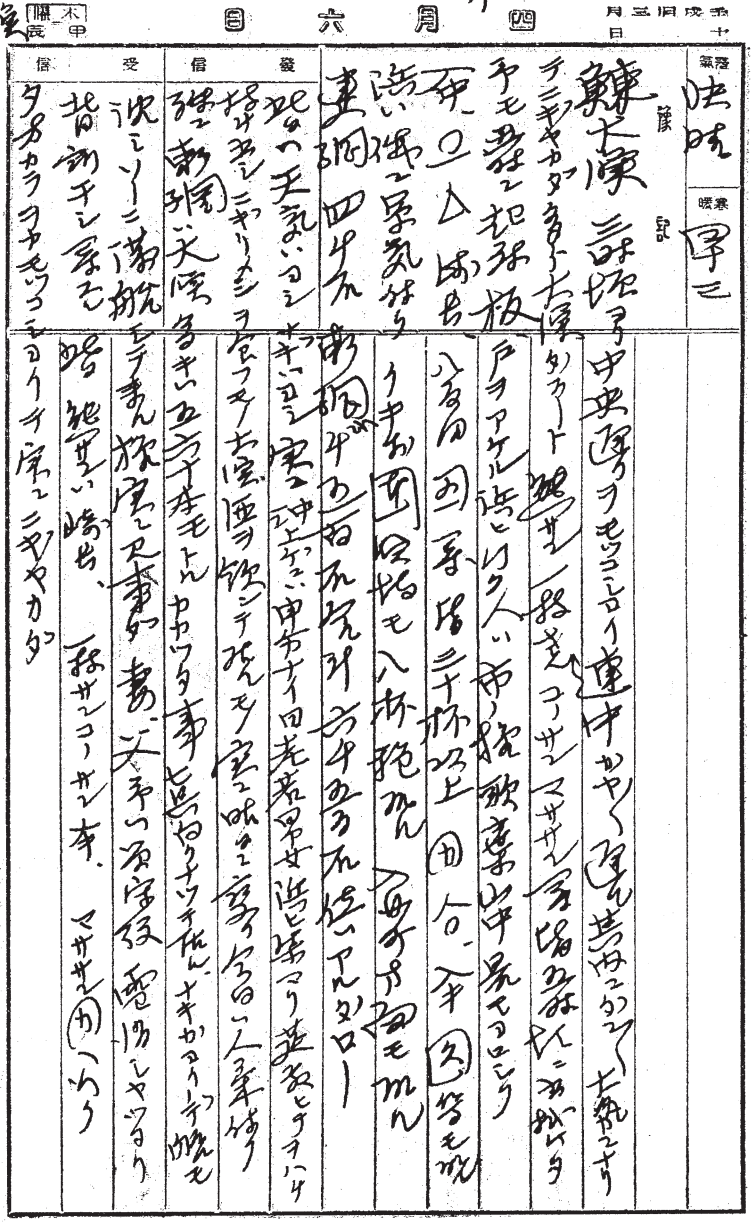
欄外・上＝初メテモッコショイ出ル、刺網大漁。左＝大漁為学校ハ三日間休ミニナル。トミ、昨日一日休ミ今日ハ出席シタ。

日記に出てくる鰊場の用語

・石（こく）＝鰊を身欠きにすると重量は約1／5に減ります。ですから米一石（一八〇リットル＝一五〇キロ）と同じ重量の身欠きをつくるには、鰊が七五〇キロ必要です。

・杯（ぼい・はい）＝一般には枠船から鰊を積みとって陸に揚げる船（受船）は、約一〇石積むといわれます。どれだけの漁獲があったかは、漁場の汲み船が何回往復したかで算出しますが、このような大ざっぱとも思える方法でも、その結果には大して違いは無かったといいます。

・一本（いっぽん）＝鰊製品をムシロで梱包する時の単位。その時代や製品によって重量は違いますが、身欠き鰊で言えば、明治の頃一〇〇尾を一把として二四把を建一本、鰊漁の末期には身欠き鰊、胴鰊（身欠きをとった後）は六〇キロ、乾数の子、乾白子、鰊しめ粕、乾笹目などは九〇キロ。また、身欠き鰊を製造するときの単位で、生鰊二〇尾をつないだもの五〇つなぎ一、〇〇〇尾が標準でした。



札幌通信 2信
ふるさとの美少女

吉川義雄

新地分教場からは、五年生になると、本校と呼ばれている浜町の大きな校舎に通うことになる。

当時も現在も、教室の広さに変わりはないと思うが、その頃の教室は、必ず六十人以上の生徒が机を並べていたし、それが当り前のことと思っていた。

本校に移って少し戸惑いを感じたことは、分教場では入学時から男女の一教室だったが、本校では男女が別々の教室と、混合の教室がそれぞれ一教室づつ、計三クラスが編成され今までの仲間はバラバラにされた。

私は分教場時代と変わらない男女混合の「は組」だったから、一応変わったことはなかったが、男ばかりの「い組」や、女ばかりの「ろ組」では複雑な思いが各自にあったようだ。

昭和七年、この頃の時代相も「男女七歳にして席を同じゅうせず」のバカげた思想をまだ色濃く引きずっていたし、加えて、万事オクテに育っていた十歳の私には、異性に対する関心は余りなかったようだ。

今思うと、この「は組」の頃から、私の中に大きな変化が起こり始めたようだった。分教場では、いつの頃からか「頭がよくて、美しい」と思って、遠くから眺めていた少女が同じ教室となって、私の秘かな喜びとなったし、今またひとり、教師の問いに明快に答える美少女が本校からも現れ、私の喜びは大きくふくらんだ。

この頃から私の学業成績は、自分が呆れる程急速に向上し始めていた。発表能力のまるでなかった少年が、自分では気付かぬうちに、夢中で自己主張を開始したらしい。

彼女たちは六年を終えると、当然のように都会の女学校に進学して古平を去った。

淋しい思いはあったが、高等科二年を終えると、私は漁師に不向きとあって、札幌の書店勤め、引き続き海軍兵として出征。戦後の古平に帰って来るまでにあっさり十年余の歳月が流れていた。

社会人となって、多くの女性とも接してきたはずだが、不思議なことに何年経っても同級生の二人の美少女の面影が私の中から離れることはなかった。何のことはない、女性の美の象徴として完璧に固定してしまっていたのだ。

戦後、確かに古平で再会しているが、以前通り、私は遠くから尊敬の目で見つめ、ついぞ言葉も交わしていない。

私の札幌生活も永くなっている。少年の私がこの町に来た昭和十一年頃の姿は急速に失われ、わが家の前を、近くの高校に通う男女生徒が肩を抱いたり、手をつないだりして通っていく。他の生徒たちもその前後を通って行くが、他人のことは全く意に介していないようだ。

異性とは容易に口も利けない時代に育った私も妻も、「一体どうなっているんだろう」と、ただ驚くばかりの進化である。プラトニックラブなんか、小説にもならぬ、時代遅れのシロモノになっているみたい。

お二人とも亡くなられたが、私のいのちの中では、遥か昔の美しい少女が微笑んでいる。

札幌で何人かの女性から、古平での私の印象を言われて驚いた。「言葉もかけられないカミサマみたいな存在」と。仰天していると、私の母なんか、「ホラァ吉川さんが通って行くぞうと。姉と私は窓に走って見ていたものよ」と、別の女性からも追い討ちにあった。私は口も利けない少女がいたように、私に同じ思いの人たちがいたとは、何と感謝したらいいのか。

「生涯青春」だと、ムキになっている八十歳の青年は、今でもふるさと古平の、二人の美少女の面影を大切にして生き抜いている。

郡いろはうた

さ　三郡の境にそびえる両古美山

□両古美山の由来

「りょうこび山」と聞くと、これはアイヌ語？　と思われるような名前ですが、漢字で書くと、郡名を知っている人だと何となく意味のわかる名前です。

この名前は古平・古宇・美国の3郡が接する境に位置するので、古平・古宇両郡からの古と、美国郡の美をとって名付けられたもので、標高814メートとありますから特に高いという山ではないようです。読みは『りょうこびやま』です。

今から150年程前の地図を見ると、その辺りと思われる山にヒクニ岳とありますが、これはビクニ岳と読むのでしょう。

現在のような郡名がつけられたのは、300年程前の松前藩による場所請負制度ができ、郡という区画が定められてからのことと思われます。

町史編さん室で所蔵している明治36年発行の地図（5万分の1地形図）には両古美山の名はありません。

□積丹半島を走る山地

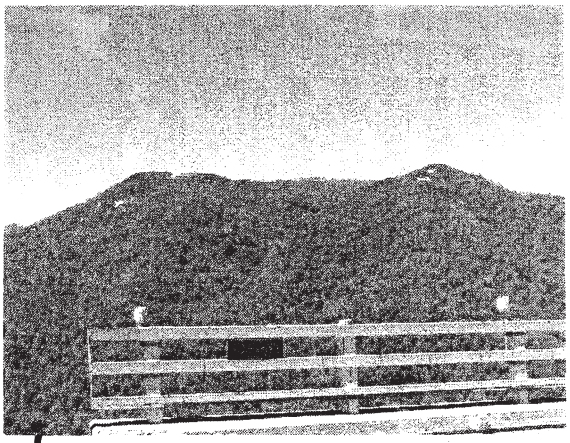
海岸線に断崖絶壁の続くこの積丹半島では平地が少なく、積丹岳・余別岳を主峰とする数多くの山々が、押し寄せる波のように重なって見え、山並みという言葉がこれをよく表現しています。

両古美山は、道道古平・神恵内線の当丸峠展望台から見えますが、峠を下り、ぼうかいばしから川を挟んで北西約1・5キロの距離で見ることができます。（写真・左側）

地図で見ると東側と南側が急なようで、北側へ長く延びた尾根が泥の木山（904メートル）へと続いていて、現在の積丹郡（3町村合併で美国郡は消滅）との郡境となっています。

□春は山菜の宝庫

両古美山は道道から頂上へなだらかな道が続き、山頂までは1・5キロ程で、山菜の豊富な地域であり、季節を追って山菜が採れるといいます。昔から神恵内へ抜ける踏み分け道もあったことから、多くの人が山菜採りに集まったようです。



積丹半島の背骨を形作る両古美山周辺の山々

戦中戦後の泣き笑いの棒太漁場体験記

吉野慶一郎

収容されていた家族との再会　野田町に進駐して来たソ連軍から、ひとまず家族の無事であることを知らされて安心したものの、無事な顔を見るまでは何としても気が晴れません。

そうしているうちに、ようやく真岡の収容所から一行が元気な姿で戻って来ました。

親子、親戚や知り合いが集まり、収容所での苦労をねぎらいながら、その無事を互いに喜び合いました。

「あの戦火の中で、よくまぁ無事で――」

「…運も良かったのかなァ」

などと、安心の後の恐怖が今さらのようによみがえってきたようでした。

野田港から順調な船出をしたが　不安な気持ちを抱きながらも、海も静かでまずは順調な航海でした。

その日（8月19日）の夕方、漁船団は予定通り真岡に入港しました。まさか、あんな危険が自分たちの周りに起きるなんて、誰ひとり予想することも出来ませんでした。

翌朝出港の予定でしたので、その晩は港内に停泊した船でやすみ、朝になって岸壁で食事をしているその時でした。沖合いに現れたソ連の軍艦から、突然艦砲射撃を受けたのです。

交戦ののち　戦時中は真岡に日本軍の守備隊がありましたが、その時はまだ残務整理などで残っていたのです。

戦争ははすでに終わっているはずなのに、不意の攻撃に対して旧日本軍の守備隊もこれに応戦し、真岡の町はたちまちの内に戦場と化してしまいました。

町には戦時中の服装をした町民が多くいましたので、ソ連軍からは、まだ軍隊が多く残っていて攻撃して来た――と、とられたようです。事実、国境線を越境して来たソ連軍と近くにいた旧日本軍との間では、この頃すでに激しい戦闘が行われていたといいます。

さて、暫くして戦闘はおさまりましたが沖では軍艦が見張っていて、漁船ではとても逃げられそうもないので、上陸して逃げようということになりました。

ソ連軍が上陸　岸壁に建っている倉庫のかげを隠れるようにして逃げ、夜になって焼け跡の建物に隠れていたら、翌朝になってとうとうソ連兵に見つかってしまいました。

収容所生活が始まる　一人もはぐれることがなく皆一緒でしたが、こんな時頼りになる男性は船長と機関長の二人で、あとは女と子供ばかり、心細い思いで、真岡小学校へソ連兵に連行されました。

小学校へ着いて見ると、そこには、船団で一緒だった人たちもみんな連行されて来ていました。思わぬお互いの元気な姿に「無事でよかったネ」と、歓声が挙がり喜び合い、これからどうなるのか分からない不安がいっぱいでしたが、まずはひと安心という安堵感もありました。

この日から、九月初め頃までの二週間余りに、およぶ、全く予想もしていなかったような収容所生活が始まったのです。

まず生きていくための生活　収容所での生活はそんな厳しいものではありませんでしたが、生きていくための食料を確保することが第一でした。食事の支給はありませんから、食料を得るための外出は自由でした。しかし、治安状況が心配なので、外出の時には女性は男装し、夜は全く外出はしませんでした。

（続く）

12ページの写真説明が落ちていましたので補足いたします。上から順に＝［浜町登記所書類］⬇［小樽警察署古平分署］⬇［群来小学校学籍簿］⬇［古平郵便電信局辞令（逓信省）］

短歌とわたし

大澤文子

果てしなく広がる日本海の対岸遠く、増毛、雄冬を望む地に、私は遅々としてすすまぬ「歌の道」を歩み続けた。

そんな時、突然、声をかけられた。

「短歌会をつくりませんか。いい先生をお連れしますよ！」

真剣に話しかけられたのは、中学教師坂井満氏だった。でも「何故？　私に？」

驚きの声をあげる私に、「道新の短歌欄にいつも投稿してるでしょう。中山周三選・芥子沢新之助選に。いつも見てすよ・・・」と。

その時の驚き！　そう言えば昭和三十五、六年頃からよく投稿していたなァ、と納得した。

両の手の
指まさぐりて点字読む
幼な盲児にとめどなく涙す
（中山周三選）

背なまるめ
子らも交じりて春陽さす
岩に海苔掻く日々の生活に
（芥子沢新之助選）

共に上位に認められ、錦織りの表紙をつけたアルバムを戴いたこともあった。今でも大切に朱色の箱に入れ保存している。

お誘いの言葉を受けて以来、どこを歩いても、何を見ても「短歌」の文字が私の頭の中をかけめぐるのだった。

幼い頃から、私は色々なことをよくかき綴っていた。書くという事に特別の興味をもっていたのかも知れない。

昭和二十二年四月に、家庭上の都合で札幌からこの海の町に越して来たが、なにか心の隅に理解のできない小さな隙間をもっていた。その隙間を埋めるすべもなく、ただ年月がすぎ去っていくのみだった。いまその小さな隙間を埋めるべき時期がきたのであろうか。

毎朝見上げる空の色も、遠く眺める海の色も幸せの色に変わったのだった。

間もなく、古平町に短歌会を結成する運びとなった。その頃、町には会場もなかったので、とりあえず信用金庫の二階の一室を無理にお借りすることにした。

講師先生は海鳴主宰北見恂吉先生と決定。会員は十六、七名。池田由太郎氏、テルさんご夫妻をはじめ、南達淳子さん、佐藤卓史氏、西下スヱさん、岩井節子さん、池田ハルさん等々。

いよいよ昭和四十年九月二十六日、初短歌会が開催された。怖ず怖ずとはじめての会場に入ってゆく会員、北見恂吉先生の厳しい面ざしに、一瞬身のすくむ思いか、咳ばらい一つする者もいない。緊張のかたまりと化したが、静かな、やさしい第一声のお言葉にやや心のほぐれを感じたのか、和らぐ面を見せたのでホッとした。

先ず自己紹介という事だった。それぞれが俯き加減の自己紹介だった。

詠草は各自二首ずつ提出し、坂井氏が印刷し配布された。端から順に自分の歌を読みあげたのち北見先生が、やや間をおかれゆっくり厳しく批評される。一応全員の批評が終わり次第、必ず講義を数十分戴くことにした。

＝一体、短歌には抒情歌が乏しいのはどうゆうわけであろう。しっとりとした抒情歌はいいものだ。『昨日の句は昨日の辞世、今日の句は今日の辞世』と芭蕉は言い遺したようだが、歌は詠むもので作るものではない。歌は抒情歌なのが本質なのだ！　＝

諄々と説かれる先生に何時も感動するのみ。講義後、「まあ海の町だから『古平町岬短歌会』だね。」と、先生から短歌会の名称を戴いた。

あれから月一回の歌会は休む

※（次ページへ続く）

俳句鑑賞

お楽しみコーナー 1

俳誌 悠 主宰 水見壽男

俳句は世界で一番短い詩です。江戸時代、和歌三十一文字の上の五七五が独立して俳諧となり、明治時代正岡子規の提唱によって、俳句として独立しました。俳句には、基本的に三つの約束があります。

一般的には『有季定型』――①季節の言葉である季題・季語が必ず入っていること、②十七音字（五七五）があること、そして、③切れ字があります。

私は子供の頃から、父、悠々子が俳句を趣味としていましたので、門前の小僧よろしく俳句をたしなみました。父の俳句人生は、日本でも有数の海の俳人と呼ばれていましたので、私も身近かな題材をもとに、俳句を作りました。

鰊舟よいさよいさと漕ぎ急ぐ

私の俳句が一番最初に活字になった一句で、昭和二十年代はじめの頃の作品です。

その頃は古平の浜をめがけて沢山の鰊が群来、夜も昼もなく豊漁がつづきました。沖合いの定置網に掛った鰊を、鰊舟を漕ぎながら陸揚げします。その時の光景を素直に絵のように作ってみました。

鰊舟を漕ぐ音頭は、大漁の時は舟漕ぎ謡も急なもの、漁が薄れる頃にはゆっくりとした流暢なものでした。

しかし、この句は豊漁の時の気合いの入った漕ぎようだったことを、今も脳裏に映し出すことが出来ます。

大漁

豊漁は何日もつづき、海岸線には篝火を焚かれることもありました。鰊の千石場所と呼ばれたふるさと古平、その古平に生を享けたことを、私は今も誇りとしております。それから数年を経て、少し大人びた頃作ったのが、

少年の初夢のこと語り合ふ

前出の句と少しニュアンスが違う感じです。

長じて二十歳の時、

卯月浪星占ひの女来る

もう断然生意気な句柄です。

そして、六十七歳の昨年、

風鈴に風の近づきつつありぬ

と発表した句が、総合誌に取り上げられ、すこし評判となりました。

× × ×

筆者紹介 ＝ 水見悠々子 長男。俳誌ホトトギス同人、千葉県流山ホトトギス会会長、同流山市俳句協会会長など。NHK俳壇へゲスト出演のほか俳句総合誌等へ広く作品発表。昭和59年古平ホトトギス会が港町に父子句碑を建立した。

"雪降って雪止んで街美しく" 壽男

※事はなかったが、会場は相変わらず町長室をお借りしたり、わが家の海側の一室も何回か、沢江公民館等々が会場となった。

古平町に文化会館が落成したのは昭和四十七年十月だった。

あれから何十年経ったであろうか。平成十五年を迎えた現在でも、私は自分の人生の一ページに「短歌とわたし」と書きたいなァと、ひとりごとを言いながらそっとペンを措いた。

編集雑記に代えて

▽今月号から、同級生で【悠】の同人でもある越野清治さんの労によって＜俳句鑑賞＞欄が誕生しました。ご愛読下さい。

▽ふるさとの写真集第3集は大変喜ばれました。スケッチを寄せて下さった渡辺嘉之さんにお礼を申し上げます。

▽金融"古平信金の項は、また越中理事長さんに助言をいただきありがとうございます。

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

—3—

橘　義春

入隊時に着て来た私物の背広を実家に送り返す準備をしていたら、楢岡上等兵が私の背広とネクタイを手にとり、

「いいなぁ。背広もネクタイも暫くごぶさたしてるなぁ」

と感慨深げに話しかけてきた。

「上等兵殿は勤め人だったのですか」

「いや、俺は軍隊へ入るまでは菓子職人やっていたんだ」

「お菓子を作るしごとですか。いいですね。街の店からは甘いものは姿を消しましたよ」

暫くは甘いもの談議に花がさき、羊羹(ようかん)の作り方まで教えてくれ、ますますこの楢岡上等兵に好感をもった。

中隊での私たち初年兵へのお客様扱いは今日一日で終わり、藁ぶとんの上で初めてラッパの音を聞きながら眠りについた。

——教練開始——

入隊して二、三日はたいした教練もなく、学科では、特に班長は陸軍刑法の脱走や逃亡罪について詳しい説明がされた。

この頃からやたらに腹が減りだしたのには閉口した。ご飯はアルミの食器にいっぱい入っていて、おかずも結構あるのになぜだろう。いつでも神経が緊張状態にあり、その上自由が束縛され、食べ物が自由に手に入らない、こんなことが原因か？

一日中腹ぺこの状態で、休憩時間ともなるとしぜん食べ物の話に熱が入り、ますます空腹感に襲われて困った状態になった。

軍隊生活も三年兵になると腹が減らなくなるのか、楢岡上等兵はご飯は半分くらい食べ残してしまう。それを私たち初年兵は、「いただきます！」とばかりに分け合って食べてしまうが、例の憎たらしい白ブタはガツガツと全部平らげてしまう。

考えてみると、彼は四か月前までは俺たちと同じ初年兵だったのだから、腹の減る習慣はまだ直らないらしい。ざまァー見ろだ。

入隊五日目頃の夕方、竹田班長が、

「この連隊に親戚の者か、兄弟がいる者はいないか？」

と言われ、

「ハイッ橘、親戚の者が四中隊におります」

「名前は？」

「矢代敏夫です」

「よしっ、すぐに電話で呼んでやるからナ」

「矢代敏夫、二中隊へ駆け足で集合せよ」

とやったので、本人は何事が起きたのかと思い緊張した顔で部屋に入ってきたが、私を見て安心したようだった。

矢代敏夫さんとは一年ぶりの再会だった。いろいろと田舎の話や東京の近況などを話して別れたが、同じ兵舎に親戚がいると思えば何かと心強いものである。

いよいよ教練が始まり、敬礼や不動の姿勢、行進、体操と進み、銃を持っての教練が一中隊と二中隊の合同教育となっていた。教官は一中隊の木川田見習士官で、すらりと背の高いなかなかの男前の教官である。

教練は厳しかったが軍歌の好きな教官で、私たちも毎日の演習の行き帰りに歌わされ、いつの間にかこの軍歌『安城の渡し』が好きになってきた。教練の場所は観武ガ原演習場で、目の前に岩手山がくっきりと見え、空にはヒバリがピーチク、ピーチクさえずり、これで教練でもなければこの世の楽園なんだが・・・。

教練がいよいよ佳境に入ってきた頃、なんだか噂では部隊が解散になるらしいとか、古年兵間では大分ささやかれているらしい。

（続く）

短歌

古平町岬短歌会

思はぬにバイオリニスト演奏す友のささやかな誕生日
広き芝生一夜の雪に覆はれて風に飛ぶ枯れ葉を小鳥かと見る　池田テル

街空に正午を告ぐるサイレンの塔の傍への落葉松一本
落葉松は金のマントを羽織る如秋の夕日に照り映えて居り　奥山きよみ

鉢植ゑの花に水やるひとときを持てる生活大事にしたき
ちぎり絵のやうに降る雪眺めつつ幼き日日としばし重ぬる　田中香苗

手に持てばしっとり重し秋の日の濃き朱の色に熟れし柿の実
鱈漁に出でゆく漁船を追ひてとぶ沖の鴎らみぞれ降るなか　堀典子

俳句

古平ホトトギス会

雪掻きの疲れいやし山の温泉へ　斉藤波留
元日やテレビの歌舞伎一人じめ　山口悦子
玻璃越の寒雀らに日矢射しぬ　越野敏雄
天国も凍(しば)れてますか弟よ　大和田絵伊
わが初めて作りしいびつなる瓶をいく度も向きを変へて眺める　鈴木時子
賑やかに庭木に止る群雀の鳴くを聞きつつ朝の除雪す　丹後初江

▽お詫びして訂正いたします△　池田テル
(正)外つ国に学べる孫よ良き友と風邪引かず居よ晩毎に思ふ
(誤)外つ国に学べる孫よ良き友と風邪引かず居よ世毎に思ふ

打つ人の列長くなり除夜の鐘　関口勝志
遣されし対のセーター派手になり　よしざきり
怠け癖ついて正月終りけり　仲谷比呂古
湯布院の間歇泉や冬日中　越野清治
漁火の大海染めて年暮るゝ　室屋弘子

幸平吟

古平の源流となる滝の音
滝音の谺大きくなりにけり
滝音の迫り来し山麓かな
一瀑の一山谺ゆさぶりし
目覚めてもまた眠くなる吹雪き哉

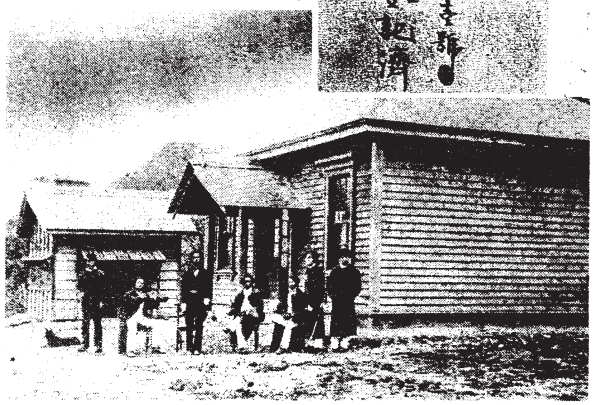
古平町史年表

— 9 —
明治１６年～同２２年

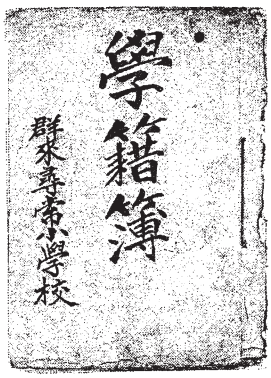
☞ 明治１６年 （１８８３）
◆古平に来た僧、安達泰隆が浜町に日蓮宗法運山正隆寺を浜町に創建する。明治４５年、大石養淳が四世住職となる。
身延山から下付を受けた日蓮大菩薩が本尊として祀られる。

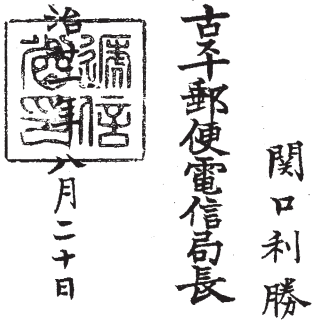
☞ 明治１８年 （１８８５）
◆古平町の大井嘉蔵、猪股五平の二人が古平川上流で金鉱の露頭を発見するが、これが後の稲倉石鉱山の始まりとなる。

☞ 明治１９年 （１８８６）
◆北海道庁が置かれ古平郡役所となる。古平郡長佐本光暉が古平警察分署長を兼務する。
◆浜町に隔離病舎が新築される。



☞ 明治２０年 （１８８７）
◆浜町に浜町登記所が開設され、登記事務は郡長森長保が行う。
◆古平警察分署が古平警察署となり、小泊・野塚・余別の三分署が新設される。
◆寿原要太郎が浜町に肝油製造工場を建てる。
◆浜町登記所が設置され、３２年の廃止まで開設される。



☞ 明治２１年 （１８８８）
◆各町内で経費を負担し古平郡立病院を設立する。
◆３月、新地町６番地に、新地小学校(５２坪)を新築する。
◆６月、浜中小学校校舎４１坪を増築する。
◆１０月、浜中小学校が火災によって全焼し、一時、休校になったが、港町の収税倉庫を仮校舎として３学級編成で授業を開始する。
児童数２０１人(男子１４８人・女子５３人)

☞ 明治２２年 （１８８９）
◆群来小学校創立。１学級で恵比須神社下に開校。
◆古平外二郡役所（古平･美国･積丹）が廃止になり小樽外三郡役所に合併、小樽外六郡役所となる。
◆稲倉石鉱山で金・銀が採掘され、最盛期には従業員が３００人にも達する盛況を見せる。
◆古平郵便取扱所が古平郵便電信局と改称し、港町に移転する。局長に関口利勝が就任する。